

看護学生の老人施設実習前後における老人観 及び老人イメージの変化に関する研究

近藤 益子¹⁾・太田 にわ¹⁾・池田 敏子¹⁾
前田 真紀子¹⁾・伊東 久恵²⁾・太田 武夫¹⁾

Changes of Student Nurses' views and Images of the Elderly
before and after Practicing at Nursing Homes

Masuko KONDO¹⁾, Niwa OHTA¹⁾, Toshiko IKEDA¹⁾
Makiko MAEDA¹⁾, Hisae ITO²⁾, and Takeo OHTA¹⁾

A questionnaire survey was done by 76 third year-students of the nursing course before and after practicing at the two nursing homes in 1989. The same questions about their views and images of the aged person were given twice and compared. Question to image consists of 38 paired items respectively opposed to be rated on a seven-point scale. The results showed that their views and images had changed from idealistic to realistic as a result of their practices. There were some differences found in these changes by the home and the period of practice.

Key Words : 老人看護, 学生実習, 老人観, 老人イメージ

はじめに

人口の老齢化が急速に進み多方面からの対応が期待されているなかで、国のレベルでは老人保健医療の充実や高齢者保健福祉政策¹⁾(ゴールドプランなど)の策定を通じて対応が進められている。医療とりわけ看護の分野でも老人看護の重要性が増加し、マンパワーとしての量的問題のみならず、関係者の質的向上が求められている。看護教育の場でも、ニーズに応え得る実践能力の開発育成が重視されるようになり、1990年のカリキュラム改正では、老人看護学が成人看護学より独立した教科となった。看護の実践は対象の理解を基に始められるが、看護学生がその実習期間にどのような老人観やイメージを持つことが出来るかということは、学生の人間理解の場として重要である。従って教師にとってはどのように講義や実習を位置づけるかを考えることが重要であろう。

また今日のように核家族化が進み、地域での生

活感も希薄になっている状況では、学生の日常生活での老人との接触も減少しており、老齢者の理解も充分ではないと考えられ、その意味でもカリキュラムの上でこれまで以上の配慮が必要であろう。そのような観点から、著者らの学科では従来のカリキュラムにおいてもこの点を重視して1987年開学以来、老人看護学を独立させ、3週間の実習期間を指定し、2週間を病棟実習、その後1週間を特別養護老人ホーム(以下老人ホームという)の実習に当てて来た。特に老人ホームでの実習は、先に述べた老人の理解という点に置いてあるので、実習の前後に学生の老人観やイメージの変化などについて調査を実施している。今回はその一期生のデータについての分析を通じて得られた若干の知見について報告する。

研究目的

今回の研究目的は、主として実習前後の学生の

1) 岡山大学医療技術短期大学部看護学科
2) 前岡山大学医療技術短期大学部看護学科

老人観、老人へのイメージの変化について分析したいと考えた。またこれまでの老人との関り具合、実習施設の違いや実習時期の違いがどのようにに影響するのかについても検討した。更に学生の反応から今回あげたイメージ調査の38項目について、簡単な類型化を試みた。

調査方法

調査は1989年、当学部看護学科第1期生の3年次76名を対象に、老人ホーム実習の前後に自記式アンケート法により実施した。この年当学科の老人看護の教科としては、2年次に30時間の老人看護講義と半日の老人ホーム見学があり、3年次は2週間の病棟実習とそれに続く1週間の老人ホームの実習がある。学生は1年間3週間単位の臨床看護実習のローテーションのどこかにこの実習を行うが、その時期はグループによって異なる。病棟実習は比較的老人の多い皮膚科、泌尿器科及び婦人科の3科で行われている。この時の老人ホームの実習は2箇所で行ったが、いずれも大学より徒歩20分の位置にあり、8月の夏休みまでに実習をすませた前半4グループ（4組34名、以下前半グループという）は1970年設立の比較的古い特別養護老人ホームで、夏休み以降の後半5グループ（42名、以下後半グループという）はこの年新設された特別養護老人ホームで実習した。

アンケートの内容は老人観および老人のイメージについての質問で構成した。老人観は老人をどのような存在と考えているかを問うもので、老人

と思う年齢、老人と思う理由及び老人の処遇にたいする実感を問う3項目である。老人のイメージは老人という言葉で心の中に思い浮かべる像または心像の表現を、守屋ら²⁾の使用した相反する38項目の形容詞対で表現させた。これは、例えば生き生きした／生気のない、清潔／不潔、楽天的／悲観的、独立的／依存的といった項目について7段階法（非常に、かなり、やや、どちらでもない、やや、かなり、非常に）で回答させるものである。

調査は実習直前（以下実習前という）及び終了直後（以下実習後という）の2回実施し、得られたデータはパソコン用統計パッケージ HALBAU によって処理した。分布の検討は χ^2 乗検定により、また項目の類型化にあたってはクラスター分析を行った。

結果

1) 老人と思う年齢

何才から老人と思うかという問いについて、70才からとするものが一番多く、次いで65才からとするものが多い。実習前ではこの両者で94.6%、後で85.3%を占めた。これらの比率の前後比較で分布上の差は認めなかった。

2) 老人と思う理由

老人と思う理由を自由記入法で只一つ挙げさせた回答を分類すると図1の通りであった。実習前に最も多いのは頭髪、顔貌、しわといった外見上の特徴（36.0%）で、ついで歩行、生活上の身体

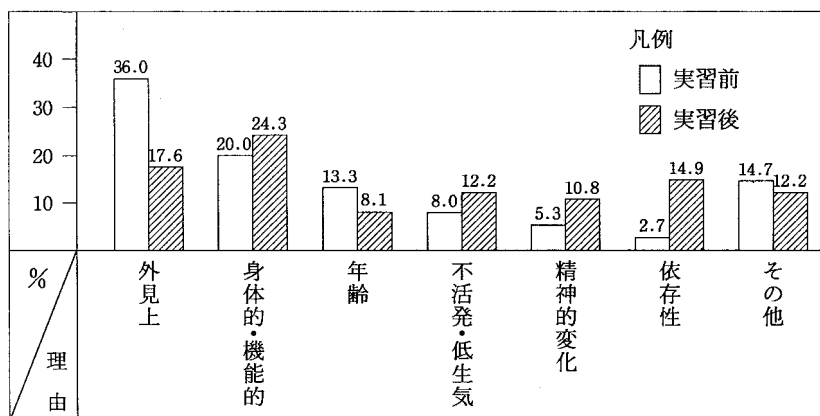


図1 「老人と思う理由」の実習前後比較

的・機能的ハンディキャップ (20.0%), 年齢 (13.3%) であった。これが実習後には外見上 (17.6%) の捉え方が減少し, 身体的・機能的ハンディキャップ (24.3%), 依存性 (14.9%), 精神的変化 (10.8%) という順になった。とくに依存性に注目するものの増加が顕著で, 分布に 5% 以下の危険率で有意の差が見られた。

布について統計学的検討を行った結果ではそれぞれ有意の差は認められなかった。

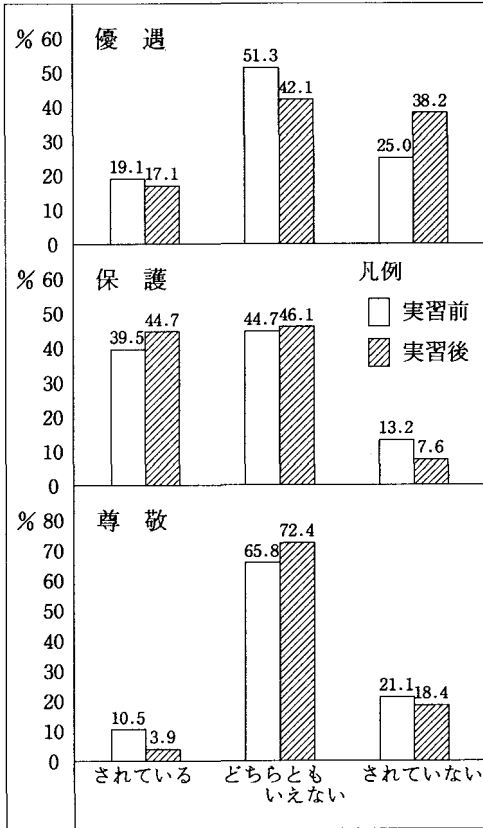


図2 老人の処遇に関する実感 (実習前後の比較)

3) 老人の処遇についての実感

老人について優遇, 保護, 尊敬されているか否かについて「されている」、「されていない」、「どちらともいえない」の回答を選択させた結果は図2の通りであった。前後ともにどちらとも云えないとするものが多いが, 優遇の項について実習後にされていないとするものが増加傾向をしめした。実習前後の頻度分

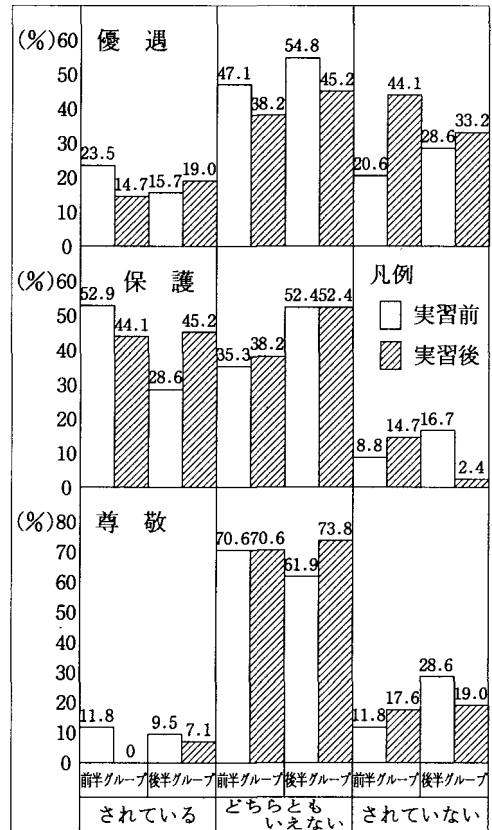


図3 老人処遇に関する実感 (前・後半別グループ比較)

前半および後半グループごとに処遇に関する老人観の前後の変化を見ると, 図3のごとく両グループに違いが見られ, 分布に有意差は認められなかったが, 実習時期によって学生の受けとりようが異なることを認めた。

老人と話す機会の有りとする者49名 (64.5%) とないとする者27名 (35.5%) について老人の処遇についての実感に違いがあるかどうか検討すると図4の通りであった。「尊敬されているかどうか」の項について会話の機会が有とするものより, 機会が無いとするものに「されている」「されていない」という項目が何れも高く, 分布に有意の差がみられた。機会が有とするものは, 「どちらとも云えな

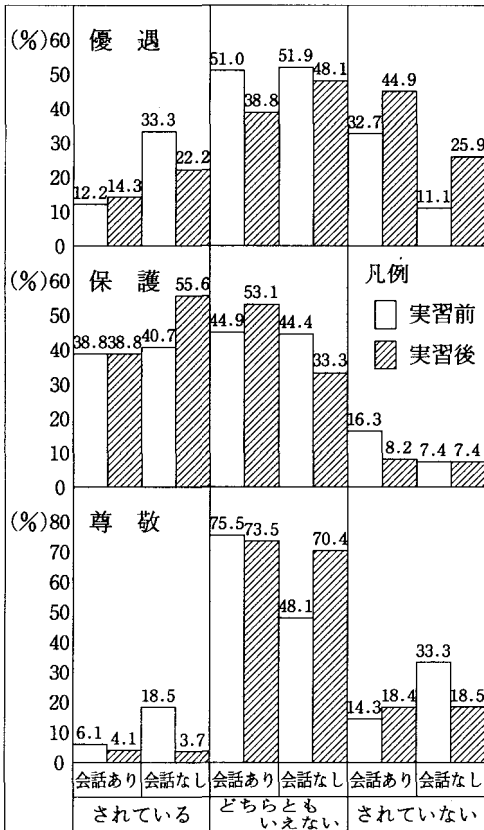


図4 老人の処遇に関する実感
(老人との会話の機会の有無別比較)

い」とするものが37名(75.5%)と多かった。

4) 老人のイメージ

38項目について前後の比較を、答えを1~7点の順序尺度に変えて求めた平均点の変化で表したものが図5である。アンケートのままだと、右から左あるいは左から右と変化は様々であるが、図ではいずれも見易くするため左から右へと変化を同じ方向に置き換え、差の大きいものから順に矢印で示した。これとは別に個々人の前後の差を求め、その平均値について大きいもの及び小さいものについて5項目ずつ選ぶと、図5とはやや異なり表1の通りであった。また個々人の前後の差の絶対値は、方向はどちら向きであれ前後のイメージの変化の大きさを示すと思われるが、

その各人の値の絶対値の平均値をとり大きい順に並べると、表2の通りであった。

実習時期による違いを見ると、前半のグループでは「能動的」で、後半グループでは「誠実な」、「好意的」、「親切な」の3項目においてマイナスの変化が有意の差であることを認めた。

表1 実習前後における老人のイメージの変化
(前後の差の平均値)

変化の大きい項目

1	満足な → 不満足な	0.946
2	にぎやかな → 孤独な	0.921
3	雄大な → ちっぽけな	0.865
4	独立的な → 依存的な	0.853
5	おだやか → はげしい	0.784

変化の小さい項目

1	デリケートな → がさつな	0.013
2	進歩的な → 保守的な	0.280
3	強い → 弱い	0.293
4	健康な → 不健康な	0.307
5	はっきりした → ぼんやりした	0.320

表2 老人イメージ前後差の絶対値
(平均値)

平均値の大きい項目

1	注意深い / 不注意な	1.237
2	現実的な / 空想的な	1.213
3	満足な / 不満足な	1.173
4	気短な / 気長な	1.147
5	硬い / やわらかい	1.145

平均値の低い項目

1	美しい / みにくい	0.527
2	裕福な / 貧乏な	0.547
3	健康な / 不健康な	0.680
4	楽天的な / 悲観的な	0.703
5	進歩的な / 保守的な	0.707

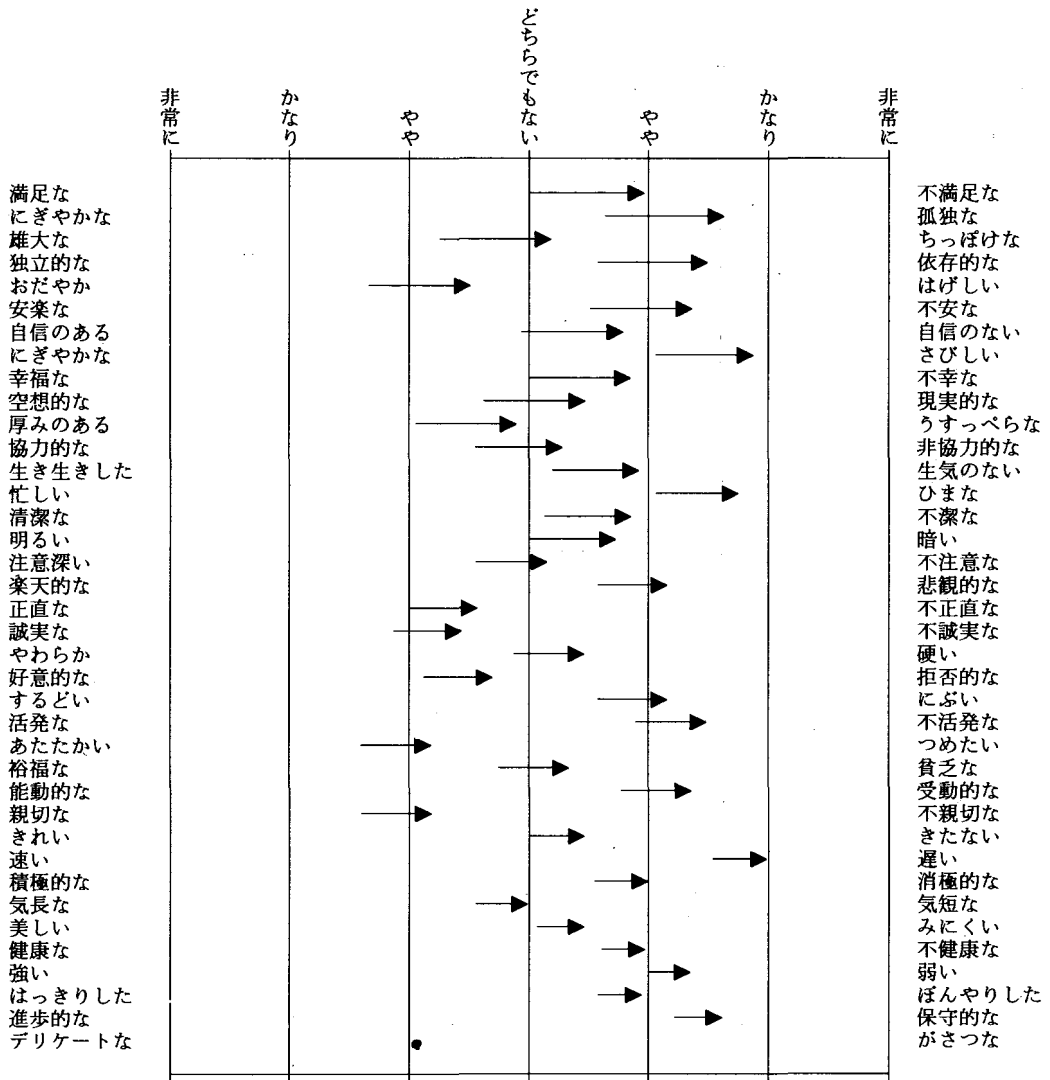


図5 実習前後におけるイメージの変化 (平均値)

38項目の相反するイメージについては、ある程度老人のイメージを明確にすることが出来たと思われる実習後の点数についてクラスター分析をした。群別の関係が比較的判り易いワード法によるデンドログラムを示すと図6の通りであった。「正直な」と「誠実な」、「あたたかい」と「親切な」、「美しい」と「清潔な」、「健康な」と「幸福な」といった項目にイメージの近接性がみられた。

考 察

1) 老人観の変化

老人ホームで生活する老人は殆ど70才以上である。また日常生活上のなんらかのハンディキャップを持っている。従って老人ホームでの実習は、加齢に伴う心身上の変化を観察出来る良い機会でもある。それまで老人との接触が少ない学生や健康な老人のみを見てきた学生にとっては、老人へのイメージが大きく変化する機会ともなる。老人

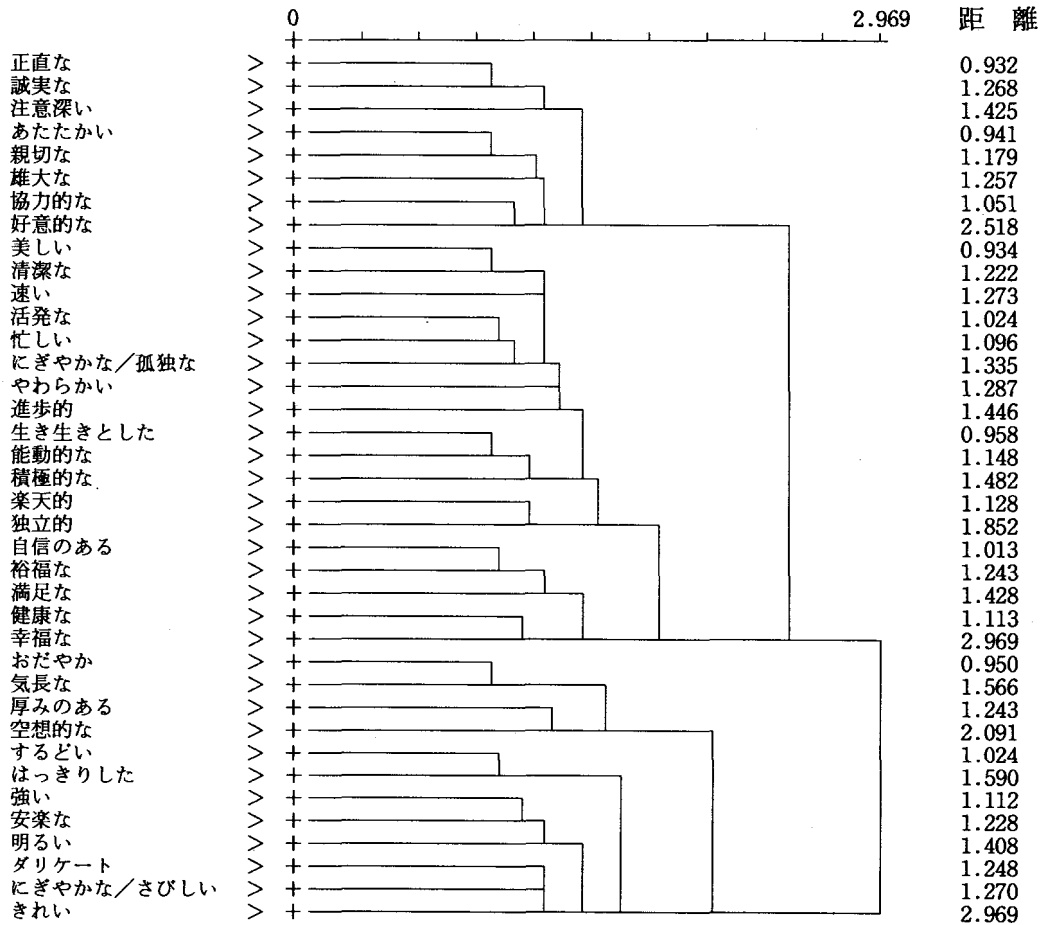


図6 イメージのクラスター分析法 (ワード法)

と思う年齢が引きあがったり、図1に認められるように老人と思う理由が外見的理由から身体機能面へと観点が移ったことは、この実習がこれまでの観念的な見方から現実的な見方になる契機となったと云える。いろいろな介護を通じて依存性という面にも目を向けるようになり、それ以前に比し具体的な、あるいは多面的な見方が出来るようになったと考えるが、老人の内面的変化にまで触れるようになり得たかどうかは分からない。

老人の処遇についての質問で、「されている」とする比率で見ると「保護」、「優遇」、「尊敬」となるが、実習後は「優遇」されていないとするものが増加し、「尊敬」されているとしたものも減少傾

向を示した。閉鎖的環境での日常性、家族を含む外部との接触の少なさ、あるいは生涯をホームで終わるものが多い現実を知ることを通じて、老人の生活の暗い面を見ていると考える。この点については実習の前半と後半グループとに分けて見ると図3のごとく差が見られる。すなわち前半グループでは実習後に全般に処遇は悪いとする方に変化し、特に「優遇」されていないとするものが特徴的に増加するが、後半グループでは実習前から3項目ともにされていないとするものが多く、実習後は「保護」されているとするものが増加した。この後半グループの実習前の低い評価は、先行する3ヶ月ないし6ヶ月の病棟実習の体験が影響し

ているといえる。

即ち先行する成人看護系の実習中の加齢や疾病罹患および治療のきびしい現実的側面を見聞することを通じて、老人生活の楽観的見方が抑制されたのであろう。また、前半グループの体験も情報として入っていることも考えられる。この点について、鳴海ら³⁾の「病棟実習では、その老人観を肯定的に変化させることができず、中立的反応へ移行させた」とする報告とは異なり、短期間でやや否定的傾向に移った状況があったことがわかる。そして治療ではなく介護中心の老人ホームでの実習を通じて、老人向けの住環境や老人の生活の別の側面を見ることができ、その印象として「保護」されているという印象を持つに至ったのであろう。

老人の特性や生活を端的に表現することは困難である。学生は老人との出会いを重ねて自己の老人観を形成し、それをもとに老人問題を老えたり人生について考える機会を持つことが出来る。老後の生活の否定的側面に触れることも、それが現実であり、ある意味では普遍性を示している以上、学生とりわけ看護学生にとっては重要な機会である。また心身上のハンディキャップそのものがそこにいる理由となつる病院および老人ホームの老人に接して、看護と介護の二つの場面に直接的に参加することの意義は大きい。今回のデータに見られる学生の老人観やイメージの変化は、方向はどうであれ学生に与える実習のインパクトの強さを示すもので、その度合を把握することによって学習効果を評価することも重要であろう。

前半グループの実習施設は比較的古いもので、老朽化している点および近年設立の施設が種々の点で施設のイメージをよくしようとしている点で環境面で劣っている。前半グループが実習後に「優遇」されていないと実感したことは、人的というより施設のイメージを反映させたものと考えられる。

老人と話す機会があるものより、ないとするもののほうが尊敬されている、もしくはされていないとするものが多く、どちらともいえないとするものが少ない。これはそれなりの老人観をもって判断しているのであるが、実習後には圧倒的にどちらともいえないに変化している。優遇について

は実習後にいないとするものが増加し、保護についてはされているとするものが増加している。しかし老人との話す機会がありとするものには、このような顕著な変化は前後で見られない。鳴海ら³⁾はこのような点に関して、学生の老人観は同居、学習機会の有無とは関係が見られず、話す機会の有無と関係が見られたとしている。今回の結果からも話す機会の有無が老人観に影響していることを認め、特に話す機会のないものは自分の判断でそれなりの判断をするけれども、実習によってそれが訂正されることが認められた。またその変化の仕方も優遇、保護、尊敬といった項目でそれぞれ異なり、学生の繊細な感受性によって老人観が一定の深みをもって変化しているといえる。そのような効果からも老人とのコミュニケーションの機会を設定する意義が存在すると云えよう。

2) 老人のイメージとその変化

他学²⁾の看護学生での調査結果と比して性格や人柄に関しては比較的肯定的であったが、全般に実習前にすでに多くの項目で否定的な捉え方であった。実習前に比較的肯定的な見方をしている、即ち「やや」より「非常に」の方向に肯定的な判断をしている項目は「おだやかな」、「あたたかい」、「親切な」の3項目のみである。逆に比較的否定的な項目は「さびしい」、「ひまな」、「遅い」、「弱い」、「保守的な」の項目で、実習前では性格的には肯定的に、動作や反応という点で否定的に捉えていることが分かる。実習後にイメージはほとんど全項目で否定的な方向に移行したが、これは老人像が観念的なものから現実的に、あるいは具体的になったことの現われといえる。イメージの変化が大きい項目から見ると、老人との交流を通じて理解できる精神面・情緒面のものが多く、その上に幸福感、満足感といった点の低さを感じている。それには特別養護老人ホームの入所基準によって一定のハンディキャップを有する老人集団から得られたイメージという側面も有する。老人の援助を考える上で、これらの否定的捉え方を出発点として学生が看護、介護のあり方を考えだすようになることが重要で、それが実習そのもの

の効果を見る視点ともなろう。

各得点の絶対値をとったのは、得点の平均値だけでは、変化の幅が相殺される可能性を考慮したものである。平均値の差から得られる項目の順とはやや異なり、概して「注意深い」、「現実的な」、「気長な」といった性格的側面に関するもので変化が大きく、これは実習期間中に受け持ったり、接触のあった老人の個性に影響され、これまでもっていたイメージが肯定もしくは否定の側に変化したものではないかと考える。

前半後半の比較で変化が大きかった項目に違いがあることも、病棟実習の影響の有無を反映していると思われる。また老人と接触の機会が少ない前半グループでは表面的に判断しやすい老人の受動的な様子に動かされたのに対し、病棟で病床にある老人を見てきた後半グループの学生にとっては、老人ホームでの実習は老人の内面的部分を判断する機会になったのであろう。その動きは否定的な方向であるが、より内的なかかわりを持ったことがわかる。守屋ら²⁾は3世代に分けて老人のイメージを調査し、青年層のイメージはやや否定的、壮年・老年層は好意的なイメージを回答したと報告している。また大淵ら⁶⁾は看護基礎教育終了時の新卒看護婦の調査で、積極的に老人看護教育を受けた群はそうでない群と比較して老人を否定的に見ることが少ないと報告している。イメージは知識や体験を重ねて照合しながら形成されるもの⁷⁾であろうから、学生時代にたとえ短期間であってもそのような体験ができる機会をもつことは、たとえイメージの変化が否定的な方向であっても、むしろ現実を直視する機会として重要であることが今回の結果からも指摘出来る。

3) 老人のイメージの類型化

ある程度老人との交流を経た後のイメージという意味で実習後の点数についてクラスター分析を行ったが、種々の分析法のうちウオード法の結果が比較的理解しやすいと思われた。図から群分けを行いその意味を読んでイメージ群としてみると、図5の上部から「人柄」のイメージ（「正直な」から「好意的な」まで）、「外見」のイメージ（「美し

い」から「やわらかい」まで）、「生きる姿勢」のイメージ（「進歩的」から「独立性」まで）、「充足感」のイメージ（「自信のある」から「幸福な」まで）、「温厚さ」のイメージ（「おだやかな」から「空想的」まで）、「快活さ」のイメージ（「するどい」から「きれい」まで）の6群に大別出来る。この類型化を通じて、とくに近い距離にある、例えば「正直な」と「誠実な」、「生き生きとした」と「能動的」、「おだやかな」と「気長な」などのように、その意味からも同じと考えていい項目は老人のイメージ調査には整理してゆくことが出来よう。またこの類型化の群分けでは入りきれないかも知れない項目、例えば「知的さ」や「経験」のイメージなどを付け加えることも必要であろう。この点については、今後のデータを含めて検討したいと考える。

む す び

今回本学3年次看護学生76名を対象に、老人ホーム実習前後の老人観および老人のイメージについて調査し、とくにその前後の変化について分析した。その結果を要約すれば次の通りである。

- 1 老人観、老人イメージ共に実習後は変化するが、内容的には観念的、外見的な見方から具体的、内面的な見方になった。
- 2 実習前後の老人観は実習の時期、実習の場所、老人と話す機会の有無などの違いによって差が見られた。
- 3 老人イメージは実習後には総じて否定的な方向に変化した。その変化にも実習の時期による違いが認められた。
- 4 38項目の老人イメージは大略6群に区分出来た。

看護教育において、老人ホームは病棟とともに老人の看護を考える上で重要なフィールドである。ここでの実習が学生に与える教育的インパクトは大きいものがある。それによって起こる学生の変化の広がりや深さを出来るだけ客観的に把握して、それを参考に学習効果を上げたいと考えている。

文 献

- 1) 財団法人厚生統計協会：国民衛生の動向，P126，1992
- 2) 守屋滝乃，稲垣宣子，鈴木偉代，夏目みつ子：「老人」に対する意識調査 三世代における「老人観」と老人のイメージ，看護教育 28：537-541，1990
- 3) 鳴海喜代子，佐藤敏子，藤沢里子，永江美千子，正木治子，土屋陽子，野口美和子：看護学生の老人観に関する研究 第3報—臨床実習終了後の変化，千葉大学看護学部紀要，10：13-21，1988
- 4) 鳴海喜代子，野口美和子，土屋陽子，井上幸子，加藤敏子，藤沢里子：看護学生の老人観に関する研究 第2報—老人看護の講義受講後の変化—，千葉大学看護学部紀要，8：11-18，1986
- 5) 鳴海喜代子，野口美和子，土屋陽子，井上幸子，加藤敏子，藤沢里子：看護学生の老人観に関する研究 第1報，千葉大学看護学部紀要，7：1-9，1986
- 6) 大淵律子，鎌田ケイ子，巻田ふき：看護基礎教育終了時の老人に対するイメージ—老人看護の教授の有無による比較—，第22回日本看護学会（看護教育），87-89，1991
- 7) 水島恵一，上杉喬：イメージ心理学 I イメージの基礎心理学，誠信書房，東京 259-297，1988

(1992年10月30日受理)